

平成 28 年 2 月 10 日

## 博士論文審査結果報告書

報告番号

学籍番号 1329022001

氏 名 足立 さつき

論文審査員

主査（教授）染矢富士子



副査（教授）柴田 克之



副査（教授）能登谷 晶子



論文題名 A survey of the development of syntactic comprehension in neurotypical infants（定型発達幼児を対象とした統語理解の発達調査）

### 【論文内容の要旨】

目的：日本語を獲得するためには、言語習得の上で語彙のみならず統語（文法）の理解表出も重要である。統語の獲得は、小児の高次脳機能において高度な機能の1つと言われているが、本邦では幼小児向けの評価法がない。本研究では、定型発達児の統語理解の評価法作成のための基礎的データを取得することとした。方法：予備調査を行った上で本調査を施行した。調査は個別に実施した。本研究で用いた各課題の刺激文の採用には、既報告を元にした。本調査の対象は、3歳代から6歳代の保育園児125名。課題は8項目（課題1は正語順文、課題2は比較文、課題3は使役文、課題4は貸借文、課題5は受動態、課題6可逆文の受動態、課題7授受文、課題8は可逆文の授受構文）である。また、調査から1ヵ月以内に、＜S-S法＞言語発達遅滞検査、絵画語い発達検査（PVT-R）、質問-応答関係検査短縮版（Q&A）を実施し、8課題との関係を検討した。結果：各年齢群における課題毎の平均正答率は、課題1と2は、全年齢群で60%以上の通過率を示したが、課題3と8は、どの年齢群においても不通過だった。課題4、7は4歳以降で、課題5、6は5歳以降で通過した。各課題と各年齢群との相関は、課題3と8以外は各年齢群で、課題3は4歳以降の年齢群で有意な相関を示した（ $p < 0.01$ ）。他の検査との関係は、課題3と8はどの検査とも相関がなかったが、PVT-Rはそれ以外の課題と有意な相関を示した。考察：本研究結果は、既報告と同様に正語順文では3歳代においても容易な課題であったが、課題3の「押させる」という使役文は、幼児期に60%の通過率に達しなかった。課題8も6歳代で正答する対象者が出現したことから、この構文は習熟までに未だ年数を要すると考えた。J. COSS（2005）の報告に比し、年齢別の通過率が若干高い傾向を示したが、これについては選択肢数の影響も考えられるが、定型発達児においても構文の理解は文型毎にその発達には個人差があるものの、概ね小学校低学年に向けて発達していくと予想された。他の検査との関係では、課題3と8を除き、有意な相関を示したのはPVT-Rであったことから、PVT-Rで用いられる上位概念や抽象語の理解には構文理解が関係していると考えられた。

### 【審査結果の要旨】

公開審査での質疑には的確に返答して、本研究の意義について述べることができていた。以上、学位請求者は本論文の論文審査及び最終試験の状況に基づき、博士（保健学）の学位を授与するに値すると評価する。

✓